



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	「継続は力なり」(fulltext)
Author(s)	黒石,陽子
Citation	学芸古典文学(7): 1-2
Issue Date	2014-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/145436
Publisher	東京学芸大学国語科古典文学研究室
Rights	

「継続は力なり」

黒石陽子

河添先生から今号の巻頭言の原稿依頼をいただいた時、『学芸古典文学』が七号を迎えたことを教えていただいた。七という数字をうかがい、河添先生のご指導の偉大さとご尽力の大きさを改めて感じていた矢先、恩師小池正胤先生（東京学芸大学名誉教授）のご逝去の知らせをいただくこととなった。

痛恨の思いを禁じ得ないまま、小池先生からさまざまご指導をいただいた三十八年の歳月を振り返っていたが、心に大きく残るもの一つに、研究誌を続けて行くことの意義を先生に教えていただいたことが挙げられる。

先生が昭和五十四年に研究室から「叢 近世文学演習ノート」を創刊された当時のことを記したい。私自身は学部の三年生だったので、まだ参加はさせていただいていなかったが、大学院生や修了されたばかりの先輩方が、自分の専門とは別に、共通の素材として初期草双紙を一作品ずつ選び、書誌調査、翻字、注釈、解説という形式を定め、一年間かけて調査と研究発表を重ね、研究誌を作り上げるといった。研究誌は、確かボールペン原紙（ガリ版摺りの次に登場した輪転機対応原版作成のための用紙で、ボールペンを使用する）に手書きで原稿を書き、それを輪転機（当時の印刷機）で手回しで印刷し、さらに一枚一枚用紙を手で折って、手作業で糊付け製本するという形のものであった。まるで十返舎一九作・画の黄表紙『的中地本問屋』（たたりやしじほをい）を地で行くようなこと（江戸時代の本屋がやっていたようなこと）を、実際にやっていたのである。先生自らも手を糊で汚しながら製本されていらつしやうと伺っている。

初期草双紙は当時殆ど研究の対象となっていないに近い状況だったので、先行研究も少なく、何も無い所から一つ一つの作品に向かい合い、全てを立ち上げるような作業だった。手探りで、体力と時間を止めども無く傾注してどこまでも進めていく先輩達の後ろ姿に、当時学部生だった私は、その圧倒的な迫力に驚きながら、「これが研究というものなのか」とその意味をまだ理解できないでいた。

その時小池先生がおつしやっていたのは「三号雑誌には絶対するな」ということだった。何かを立ち上げて、どんなことも何とか三号までは続く。けれども四号以降も継続するものは極めて少ない。四号を出し、その後どのように続けて行くことができるかが、その研究誌の真価が問われることになるのだということを教えていただいた。私自身はその四号から参加させていただいたので、先生と先輩方のご苦勞で三号まで無事完成した後の、「勝負が始まった頃」に入れていただいたことになる。実際に自分が調査・研究を始め、原稿を書いてみると、一つの原稿を完成させることが、いかに大変なことであるかを身に染みて体験することとなった。また研究誌が完成した時の、言いかげない達成感、それまでの人生で経験したことのないものだったように記憶している。

『学芸古典文学』が七号に至ったことは、既にある評価と意味を持ち始めたということである。そして大学院生諸氏にとつては、東京学芸大学大学院生としての研究レベルを世に問う意味を持っている。今その真価は問われ、そして今後どのように継続発展させていくかという段階に入っていることを自覚していきたい。執筆者たちの益々の研鑽を期待している。

もう一つ、小池先生が常におっしゃっていたことは「学問の面白さの分かる学生を育てたい」ということだった。学問の面白さは、自ら研究活動をするることによって初めて分かることである。そして研究を続ける中で次第に明確になっていく。教員としての仕事は、現在誠に多様な能力を求められるようになって来ている。そして実に多忙である。だが、未来を生きる次の世代の人々に、学ぶことの喜びを伝えることが教員としての重要な仕事であることは、疑いようの無い事実である。「学問の面白さの分かる」教師こそが、学ぶ喜びを伝えることができるのではないか。小池先生の思いはそこに繋がるものであったように思う。論文を書くことは、単に研究そのものの中に終わることではなく、多くのことに繋がっていることを、先生はおっしゃっていたのだと思われるのである。『学芸古典文学』の発表の場は、個々人の研究の成果を示すに止まらず、教師を目指す者にとり、自分を鍛える場となっている。

研究誌を一号出すことが、どんなに大変なエネルギーを必要とすることか、体験してこそ分かることである。だが、それを継続し、積み重ねていくことこそが大きな力を生み出していくのだということを感じて已まない。

二〇一四年一月

くろいし・ようこ／東京学芸大学